についても述べたいと思う。

華佗と麻酔

（吉元医院）
松木明知

1

中国三国時代の華佗は、全身麻酔下に開腹術を行ったことで有名である。

魏の曹操は彼を招いて侍医になることを求めたが、華佗はこれを拒絶したため、彼は遂に捕えられて獄死した。

このため大麻を用いたとされる麻酔法の秘伝は伝えられなかった。

華佗の麻酔法は、それまで全く中国には知られていなかった医術であり、江上波夫博士は、麻酔術は西域的な、イラン的な要素が包含されていると説く。

つまり華佗は麻酔の術を少なくともイランの幻人（マギ）から伝授されたものであろうという。

2

さらに「華佗」は中世ペルシャ語「ファディー」または

「ファダー」（Xwadāy, Khwadā）の写音であるという説が京大名誉教授伊藤義教、大阪外語大教授井本英一から提唱された。「ファディー」「ファダー」とは「閣下、先生、師匠」などを意味する。このことは、華佗がイラン系の胡人であったことを示唆する。

これに対して中国側から反論が出ているが、反論自体は説得力に乏しい。

3

最近の植物育種学的研究によれば、大麻には大別して三種類がある。大麻が産生する薬物成分カンナビノイドの生合成経路を検討して判明したものである。

大麻の麻酔性、幻覚性を示す成分はテトラハイドロカンナビノール（ＴＨＣ）であるが、中国古代の大麻はＴＨＣを生成できなかった種類であり、カスピ海近辺の大麻つまり幻人たちが用いた大麻は、ＴＨＣ産生可能な大麻であった。

古来中国では、大麻は単に食用に供せられるのみで、その麻酔性、幻覚性には全く注目されなかった。このことは中国の大麻は、ＴＨＣを生成できなかった大麻であったことを自ら示すものであろう。

4

華佗はＴＨＣを生成する大麻を入手したはずであり、この意味において彼はこの種の大麻の知識を知っていたに違いない。このことは華佗イラン系胡人説を補強して余りあると思われる。

（弘前大学医学部麻酔科）